ボルチモア サービス フォト



JOHN WATERS'

PECKER

快晴・路上　絞り…f/16



シャッター速度 $^{1}/_{200}$ 〜 $^{1}/_{250}$

快晴　絞り…f/11



シャッター速度 $^{1}/_{200}$ 〜 $^{1}/_{250}$

薄日　絞りf/8



この表は日の出から2時間後から、日没2時間前までに適用されます。
夏は一段の半分を絞り、冬は一段の半分を開けます。

ルート　受付No.　店名

恵比寿　GCE　00059　ボルチモアサービスフォト恵比寿

扱者

品名	現像料	枚数	単価	金額	お買い上げ合計	C
LC BW		35 8	16 5	560 40	¥600	⑥

受付日	仕上がり予定
10月 30日	10月 30日 1時

おなまえ　（　本中　本）

様

TEL　（　）

フジ	35ミリ	12EX	同時プリント	LC	2L
コニカ	ブローニー	24EX	焼増プリント	EC	PA パノラマ
コダック	パノラマ / パノラマ混在	36EX	現像のみ	BW	KG
リバーサル	R24 R36 R2B R				

仕上り明細		
ポストカード	シールプリント	4c/1c x 32p + H1-4
RP-L	S-6	1c x 16 P
RP-LL	S-4	白黒　現像　ベタ　S　証明

★ お 願 い ★

お預かりしたフィルムの現像処理上の取扱いは十分注意しております。万一、不測の事故あるいは処理上の故障、紛失等がありました節は勝手ながら同数のフィルムを補償させていただきますが、これ以上の責任は負いかねますので御了承ください。

カラープリントの色素は他の色素と同様に年月の経過に伴い、わずかづつ変化します。色素の変化を少なくするためには、次の点にご留意ください。

・直射日光や蛍光灯の下に長時間さらさないで下さい。
・特に物置、押入れ等高温多湿の場所に保管しないで下さい。
・薬品その他ガスに長く触れさせないで下さい。



Pecker's Family and Friends, Baltimore, 1998



JOHN WATERS' **PECKER**

GARDEN CINEMA EXPRESS VOL.59

ガーデンシネマ・イクスプレス第59号

I love ペッカー

1999年10月30日発行

発行権者/日本ヘラルド映画株式会社
発行/ヘラルド・エンタープライズ株式会社　〒104-8150　東京都中央区銀座5-11-1　tel.03-3248-1172

編集/川勝正幸＋辛島いづみ（川勝正幸事務所）
アートディレクション＆デザイン/岡田崇（ZUBAI STUDIO）

印刷/大洋印刷株式会社
定価/600円（税込）

ファイン・ライン・フィーチャーズ プレゼンツ／ポーラー・エンターテインメント製作
1998年／アメリカ映画／カラー作品／ヴィスタ・サイズ／ドルビーSRD／R-15
字幕：林 完治／上映時間：1時間27分／オリジナル・サウンドトラック：BMGファンハウス／提供：テレビ東京、日本ヘラルド映画／配給：日本ヘラルド映画


27 HA


STOP
GORDON'S

悪趣味の王様がハッピーなホームドラマを撮った!?

ジョン・ウォーターズの最新作『I love ペッカー』の主人公は、なんと誰からも愛される心優しき青年ペッカー。ウォーターズといえば、四半世紀以上にわたり、一部に熱狂的なファンを持つ『ピンク・フラミンゴ』(72) でブレイクした特殊映画監督。アンダーグラウンドの挑発者、カルト映画の帝王、バッド・テイストの伝道師、ボルチモアの悪い意味でのパブリシスト……と、数々の恐ろしげな異名を欲しいままにした男である。しかし、監督14作目にあたるこの作品は新境地か。これまでのトーンとはちょっと違う。全体はハッピー、かつ、ハートウォーミングなホームドラマなのだ。おまけに、ボルチモア以外の場所、ニューヨークが初登場！『I love ペッカー』はジョン・ウォーターズにとって、物理的にも精神的にも、世界観がでかくなった画期的な映画なのである。とはいえ、相変わらず主な舞台はボルチモアで、ニューヨークのシーンはメイド・イン・ボルチモアのセットだし。登場人物たちはビザールで、隠し味に毒はあるし……と、ウォーターズ節は健在なのであるが……。

写真好きのペッカーは、ホームタウンであるボルチモアの、ヨソから見ればかなり変わった人々、本人から見れば愛すべき人々や風景をカメラにおさめるのに余念がない。万引きの天才であるマブダチ、コインランドリーを経営する女子実業家の恋人、古着屋のオーナーであるお人好しのママ、ゲイバーで楽しく働くお姉ちゃん、いつも甘いお菓子を欲しがる妹、超・信心深いおばあちゃん……。身の回りには魅力的な被写体に事欠かないのだ。カメラを片手に、そんな小さな幸せを楽しんでいたペッカーだったが、ある日、運命が急変する。彼の写真がニューヨークのアート・ディーラーに認められたことから、一気にソーホーで個展を開催。ちょっとピンボケだったり、露出過多のモノクロ写真が、ボルチモアの人物や風景にエキゾチシズムを感じるニューヨークのアート業界の人々にバカウケしてしまったのだ。いきなり現代アートのスターになってしまったペッカーだが、いいことばかりではない。有名になりすぎて、以前のように気楽に写真が撮れなくなってしまう。被写体となったボルチモアの住人たちのプライヴァシーも侵害される始末。果たしてペッカーはこのまま芸術家の道を歩むのか、それともボルチモアの一カメラマンとして暮らすのか。究極の選択を迫られたペッカーは……。

そう。『I love ペッカー』はジョン・ウォーターズの半自伝的映画のだ。そんな彼の映画的冒険を彩るキャストが、また絶妙。ペッカー役は『ターミネーター2』(91)、『アメリカン・ハート』(92) のエドワード・ファーロング。これまでの役柄とは全く違った、脳天気なキャラクターをピースに演技。また、彼のガールフレンド役を『アダムス・ファミリー』(91) の子役で注目を集め、『バッファロー'66』(98) でブレイクしたクリスティーナ・リッチが、彼の才能を発見するニューヨークのアート・ディーラー役を『身代金』(96)、『I SHOT ANDY WARHOL』(95) のリリ・テイラーが、見事に演じている。さらに、マーサ・プリンプトンやブレンダン・セクストンⅢら、若き個性派もいい感じで参加。もちろん、そんなまっとうなキャスティングだけで済ますウォーターズではない。ミンク・ストール、メアリー・ヴィヴィアン・ピアス、パトリシア・ハーストなど、ウォーターズ組の常連も呼びつつ、ニューヨークのアート・ワールドのリアリティを出すべく、ウォーターズの友人であるシンディ・シャーマン、グレッグ・ゴーマンといった本物の大物アーティストたちも自分自身の役で登場してもらっている。スタッフのほうは音楽のスチュワート・コープランド（元ポリス）以外は、おなじみの人々。息の合った仕事ぶりを見せている。

最後に『I love ペッカー』はセックスも暴力もないのに、指定付きのR-15（15歳未満は鑑賞不可)。この作品がなぜそうなったのかは、観てのお楽しみである。

地方の若きアマチュア・カメラマンが、一夜にしてニューヨークで大ブレイク！

イノセントな18歳の青年ペッカー（エドワード・ファーロング）。小さい頃に食べ物を"ペッキング"（つっつく）していたからペッカーと呼ばれる彼には、欲も上昇志向もない。流行にもファッションにも無頓着。その代わり写真に夢中で、中古のカメラを肌身離さず、ホームタウンのボルチモアを行き交う人たちや街の何気ない風景を撮りまくっている。

今日もペッカーはボルチモアの中心部に撮影に来ていた。帰りのハンプデン行きの市バスに乗り込むや、髪を大きくアップにした黒人の女の子２人をパチリ。外を見るとバスを待つ中年男性が走ってきた少年にカツラを取られて大騒ぎ。これもパチリ。車内では超ミニを着た金髪の年増女が太腿のムダ毛を剃っている。これもパチリ。ボルチモアはペッカーが思わずシャッターを押してしまう愛すべき人たちで溢れているのだ。

でも、ペッカーが何よりも好んで被写体にするのは自分の身近にいる人たち。親友マット（ブレンダン・セクストンⅢ）は天才的な万引きの腕を誇る。コインランドリーを経営するガールフレンドのシェリー（クリスティーナ・リッチ）は仕事中毒で、つねに客に監視の目を光らせ、ルールを守らない客には一生出入り禁止を言い渡す。そして、ペッカーの愛する家族たち。古着屋をやっている人のいいママ（メアリー・ケイ・プレイス）はホームレスも大切なお客様として扱う。妹のリトル・クリッシー（ローレン・ハルシー）は砂糖中毒でいつもお菓子を欲しがり、駄目と言われると癇癪を爆発させるのが玉にキズ。パパ（マーク・ジョイ）はバーを経営しているが、向かいにできたレズビアンのストリップが売りの「裸の館」のせいで商売あがったりだ。姉のティナ（マーサ・プリンプトン）はゲイ専門の男性ストリップ・バーでMCとして大活躍中。おばあちゃんのミーママ（ジーン・シャートラー）はボルチモアーの味と評判のビーフ・サンドイッチを自宅前の屋台で売っている。ある日、ミーママは７歳の頃から祈りつづけてきたマリア像が最近喋り出したと興奮気味。「恵あふれる」とマリア像が喋るが、なんのことはない、ミーママが腹話術よろしく喋っているだけ。でも、心優しいペッカーは心から驚くふりしてパチリと撮影するのだ。

ボルチモアでのささやかな幸福を謳歌しているペッカーだったが、バイト先のサンドイッチ店で個展を開いたことから運命が急変する。ニューヨークでギャラリーを経営しているローレイ・ウィラー（リリー・テイラー）が、時にピントはずれだったり露出過多だったりするペッカーのモノクロ写真をベタぼめ。そして、その中の一枚を早速購入。さらに、ニューヨークのギャラリーで個展を開くと言うのだ。

家族とシェリー、マットとともにペッカーはニューヨークのソーホーへ、個展のオープニング・パーティに出向く。有名アーティストのシンディ・シャーマンも来ているし、ニューヨーク・タイムズの批評家レスターをはじめアート界のお歴々がペッカーの写真を大絶賛。ホイットニー美術館のキュレイターは「90年代のダイアン・アーバス」と呟く。次々に売れていく写真が１枚1300ドルと聞いて仰天するペッカーと両親たち。ひとりポツンと取り残されたシェリーだけは「みんな、お高くとまってヤな感じ」と、浮かない顔だ。

アーティストを囲むディナーの会も無事終わり、一行はグレイ・ハウンド・バスでボルチモアに帰ってくる。すかさず地面に口づけするシェリー。ちょうど地元の新聞がペッカーのニューヨークでの成功を大々的に報じていた。だが、「文化を恐れぬ家族たち」と書かれてママは気分を害し、シェリーは「シミの女神」と名づけられてしまった。そしてペッカーたちの留守宅には泥棒が入っていた。

そして、ペッカーの名声はさらに災いをもたらす。児童福祉課の人間がリトル・クリッシーの砂糖中毒を「愛情不足の運動過剰症」と決めつけて押しかけてくる。顔が知られて万引きができなくなったマットにも恨まれてしまい、シェリーもペッカーと距離を置く。ミーママは聖母マリア会の女性にインチキと罵倒され、姉のティナも、ペッカーの写真が元で大好きなゲイバーの仕事をクビになってしまう。「裸の館」のレズビアン・ストリッパーもワイセツ罪で逮捕。ペッカーは今までどおりに自由に撮影できなくなってしまった。そんなブルーなときに、ローレイがペッカーの写真展を名門ホイットニー美術館で開催するというビッグ・ニュースを持ってくる……。




SALE SECTION
MENS SECTION
Plus Sizes

ボルチモア、アイ・ラブ・ユー

文・柳下毅一郎（特殊翻訳家）
text by Kiichiro YANASHITA

理想化されたバッド・テイスト・タウン

ジョン・ウォーターズにとってのボルチモアは大林宣彦にとっての尾道のようなものだ。違いがあるとすれば、大林宣彦は市の偉人として遇されているのに、ジョン・ウォーターズはいつまでたっても鼻つまみものだ、ということくらいだろう。だが、ウォーターズのボルチモアへの愛は本物だ。一点の曇りもなく心からの誠実な愛である。それがボルチモア市民に理解されないのは、かえすがえすも残念なことだ（ボルチモア市民は、どっちかというとウォーターズのライト・ハーフであるバリー・レヴィンソンの方がお好みらしい）。ひょっとしたら臭いがいけないんだろうか。ウォーターズの愛は純粋だが、ちょっぴり臭い。

ウォーターズ映画はつねにボルチモアで撮影されているが、『I love ペッカー』は中でもハンプデンなる地区を舞台にしている。ハンプデンはボルチモアの北部にある貧困地域だ。住んでいるのはほとんどが貧乏白人（ホワイト・トラッシュ）で、人種問題はあまりない。とはいっても彼らがリベラルな考えを持っているわけではない。単に黒人が住んでいないからなのだ。近くに越してきた黒人の家には火をつけて追い出してしまう。それでも自分たちが人種差別主義者だとは思っていない。なんせ焼け出された黒人たちには毛布をあげたんだから。

ウォーターズ自身はホワイト・トラッシュではない。父親は消火器販売で財をなし、家は「グッド・ハウスキーピング」みたいな雑誌で紹介されるほどの豪邸だった。だが、そんな暮らしをしながら、ジョン少年はいつも「パンツ一枚でポーチに座ってビールをかっくらう」下品な人々に憧れていた。自分には決して真似のできないことをやってのける人たちだから。ハンプデンはそんな人々ばかりが住んでいるところである。ボルチモアの人はみな知りすぎるほどよく知っているが、鼻をつまんで決して近づこうとはしない場所である。『ペッカー』のハンプデンはかなり美化されている。ハンプデンから切り離せないドラッグも失業も暴力もない。そこは理想化された、牧歌的なバッド・テイスト・タウンなのである。見ていると、奇妙な時代錯誤感にとらわれる。これは本当に現代の話なのだろうか？　なんだか理想化された50年代のボルチモアを見ているような気がしてくる。そう、これはウォーターズの理想、住みたかった夢の国なのだ。ペッカーはウォーターズの分身、ありえたかもしれない若き日の自分自身である。

ペッカーの姿に重なる少年ジョン・ウォーターズ

ペッカーは自分をとりまく奇妙な人々、グロテスクな風物をカメラでとらえる。かつらのひったくり（ウォーターズが子供のころ、ボルチモアで流行っていたそうだ）、バスの中ですね毛を剃る御婦人、ネズミの交尾、袋を客の頭に乗せる男性ストリップの“ティーバッギング”（ちなみに今の流行は竿の方でほっぺをはたく“ヘリコプター”）、レズビアン・ストリッパー（ウォーターズが昔知っていた“ジョニー・キャッシュ似”のストリッパーがモデルである）、砂糖中毒の妹（ウォーターズ自身、子供のころは砂糖マニアだった）や宗教狂いの祖母（ウォーターズの祖母は敬虔なカソリックである）……どれもウォーターズが成長期に魅せられつづけたものばかりだ。『ペッカー』の中で、ウォーターズの過去は美しくセピア色に染められる。現代の物語であるはずの『ペッカー』だが、その牧歌的な感触はまちがいなくウォーターズの子供時代の記憶である。ペッカーのハンプデンはウォーターズの過去が詰まった玉手箱なのだ。

実際、ペッカーの被写体の多くはウォーターズが撮ってきたものでもある。ネズミの交尾からは発禁になった『デスペレート・リビング』のポスターのことを思い出さずにはいられない。そのポスターは調理されたネズミがディナー皿に載せられて供されるところを撮ったものである。頭の上に髪をうず高く積みあげたヘア狂いの御婦人がたはハンプデンをしゃなりしゃなりとのし歩いているが、この世界は『ヘアスプレー』でおなじみだ。ウォーターズ自身、自分の周囲の奇妙な趣味の持ち主をモデルに映画を撮り、ニューヨークへ打って出たのである。

ペッカーの経験の多くはウォーターズのものでもある。ペッカーには万引きマニアの友人がおり、ペッカーはもっぱら彼が盗んできたフィルムを使って撮影する。ウォーターズも高校時代の親友モナと万引きチームを組んで荒らしまわったという。モナは現像所でアルバイトしていたので、8ミリフィルムをちょろまかしてきてウォーターズにプレゼントした。それがウォーターズ処女作の材料になったのである。ちなみに現像もモナがやったので、撮影費用はまったくかからなかったとか。撮った映画は知り合いの喫茶店主に頼みこみ、店でプレミアをやらせてもらった。ちょうどペッカーがアルバイト先のサブ・ショップ（ハンバーガー屋）で展覧会を開こうとするように。ペッカーはチラシを駐車している車のウィンドウに挟みこんでいくのだが、ウォーターズもそうやって自分の秘やかな上映会を宣伝していた。妹を後ろに引き連れて、寂れた街角を歩いていく、どこか浮き浮きとしたペッカーの姿は、少年ジョン・ウォーターズそのものなのだ。






...to go



「I love」付きがなじむ映画

文・ミルクマン斉藤（映画評論家）
text by Milkman SAITO (groovisions)

『モンド・トラッショ』(69)との相似

しかし、どうにも、なんとも面妖なタイトルですな。"Pecker"なんて語に"I love"くっつけてどないすんねん。……というのはヒネクレ者が当然抱く感想として、面白いのは「I love」なんて言葉にもそれほど違和感を感じさせない、どころか妙に納得してしまう後味の良さがこの作品には確かにあるってことだ。『ヘアスプレー』(87)以後、自らが極めたヘタウマ的バッドテイストを意識的に避けてきたウォーターズであるが、このさわやかさはちょっと異様。いや、今までの世界を完全に捨ててのさわやかさならウマいこと変節しやがってコノヤローでおしまいなのだが、ウォーターズ印全開の変態変人揃い踏みで、しかもゲイ・ストリップのオージーパーティを最後に持ってきてのコレなんだから始末が悪い。いや、良すぎる？……ま、どうでもいいか。

とはいえ本作『ペッカー』、僕には冒頭からしてある映画を思い浮かべさせた。それは『モンド・トラッショ』(69)。ほとんど暴力的といえるほど緻密なモンタージュと既成音楽のコラージュが、もうずばりポップ・アートといってしまってもいいウォーターズ初期の作品だ。なんとも怪体な古いお笑いポップスをあれこれ引っ張りだしてくるのも一緒だし、主人公(『ペッカー』にもちょいと顔を出してるメアリー・ヴィヴィアン・ピアス)がバスに乗ってボルチモア・ウォッチングするところから始まるのも一緒。しかも場末のコインランドリーやストリップ・パーティで、彼女はマリア様再臨の奇跡に出会うのである。もっとも聖母役はあのディヴァインだが。

リッチは大地母神である。

勿論ディヴァインはウォーターズ映画最大のヒロイン。ならばクリスティーナ・リッチはコインランドリーのディヴァイン、いやマリア様というべきか。一年前のおおかたの無理解がウソのように、日本でも"ヘンな映画の女王"として認知されつつあるリッチだが、本作でも眉間にシワ寄せながら独裁的にランドリーを仕切っていく幼児体型に不釣り合いなオネエタマぶり、でもキャメラを向けられるとすっと胸のジッパーを下ろしてみせる不意のエロさにクラクラする。しかもこの撮影時は彼女が最も無防備に太っていた頃で、同年の『アイス・ストーム』と共にたたずまいからしてモンドな匂いを発散しまくる、いわばマニアにはたまらん時期にあたるのだけれど、きっとそんなとこも勘定に入れて、『ペッカー』では単なるヒロイン以上の役割を託されているようだ。

そもそも本作の本質が、ボルチモアで生まれ育ち、すべての映画をボルチモアで撮り、今もボルチモアを離れないウォーターズから、ボルチモアという街へ宛てた愛情告白にあるのは明白だ。浮かれた周囲の大騒ぎにひとり背を向け、ＮＹのアート屋たちのパーティじゃムスッとした顔で「ボルチモアへ帰りたい！」と叫び、故郷に着くや否やバスターミナルのアスファルトにひざまづいてキスをするリッチの姿こそが、ペッカー以上にウォーターズ自身の心情に近いのであろう(ヘンタイからの電話・手紙攻撃に難儀するトコも含めて。もっとも最近のリッチも同じ目に遭ってるらしいが)。

この「ホーム・スウィート・ホーム」的なドリームランド感覚が、"I love"つきもおかしくない八方向きするさわやかさの正体であろうし、となれば、街の本質を見つめていくことが彼のアートの本質であるとペッカーに自覚させるリッチの役割こそ、本作の核であると言ってしまっていいのではないか。彼女はつまりボルチモアの大地母神なのである、体型を含めて。


to go



悪趣味の伝道師、ソフトに吠える。

取材・文：川勝正幸（エディター）
interview and text by Masayuki KAWAKATSU

ていねいに後ろに梳かしたオールバックに、チョビ髭。カチッとしたスーツにネクタイ、でも、足元はスニーカー。パブリック・イメージどおりのジョン・ウォーターズが『I love ペッカー』のパブリシティのために2度目の来日をした。しかし、間近に見れば、お肌にはドーランが塗り塗り。あのうさん臭い髭は描いたもの、であったのだ。さらに、一歩踏み出した感あり。

記者会見でも席に着くなり、「世界中に悪趣味を広めるために、日本に来ることができて非常にうれしいです。そういえば先日、ボルチモアの悪友が"ペッカー"のプレミア試写を観終わるなり、私に"君は世界の映画の歴史の1/3の長きにわたって悪趣味を伝導してきたわけだね"とあきれていました。今やアメリカが作る映画のほとんどは、昔から僕が作ってきた"トラッシュ・ユーモア"（ゴミ映画）系ですからね（笑）。さて。今回の"ペッカー"はよく"監督の自伝ではないですか？"と質問されるのですが、自分の直球な自伝ではないけれど、"自分の30年間の映画作りに関わった人たち全体の自伝"とは言えるかも知れません。僕の映画に巻き込まれたことで有名税を支払うことになった人たちは少なくありません、自分自身も含めて（笑）。たとえば、ペッカーの家は現実にある家なんですが、僕らが一番気に入ったのは母と息子が二人暮らしをしているところでした。ところが、その息子は犯罪を犯していて、刑務所にまでは入らなくていいのですが、足輪をはめられており、半年は外出禁止という刑だったのです。そういうわけで、僕らは裁判所から許可をいただき、その家族には撮影中はホテルに移ってもらって撮影したのです。ところが、この話を美味しいと思った『ニューヨーク・タイムズ』は記事にしてしまったのです。結果、可愛そうなことにこの家族の事情はアメリカ中に知れ渡ったのです。ちょうど映画の中のペッカーが、自分の私生活を勝手に公にされたように……」と、止まらなくなるノリの良さ。いや、サービス精神の豊かさか。なんたって筆者のお土産に対して、即きれいにラッピングしたプレゼントをくれた人だからして。中身は自分が表紙のアート系の映画雑誌。ボルチモアからわざわざ"お返し"を持ってきたのだ。長い10年以上の"外タレ"取材経験で、初めての出来事である。

ウォーターズ・デイの真実

Q　ボルチモアでは"ウォーターズ・デイ"という、祭日があるという噂を聞いたことがあるのですが……。ガセネタでしょうか（笑）。／JW　祭日だったらよかったんだけどねぇ（笑）。でも、"ジョン・ウォーターズの日"というのは確かにあったよ。メリーランド州のパブリシティ、州興しっていうの？　その一環で……。『ヘアスプレー』(87)と『クライ・ベイビー』(90)の公開のときに、ボルチモア市長が銅像みたいなものを、授章式よろしくくれたわけ。僕にしてみれば、マジで"今日はウォーターズ・デイ"なんだったら、たとえば、貧乏でふだん映画を観れない人たちがみんなタダで映画館へ入れるとか。『ヘアスプレー』の封切りの年の"ウォーターズ・デイ"だったら、その日に限って無料で美容院行き放題とか。それぐらいの特典がないとつまらないよね。もちろん、そんなの無理なわけで。刑務所の囚人たちが今日は１日お休みでシャバに出れるとか、そういう面白いとこは何もなかったんだ（笑）。／Q　（笑）。今、ボルチモアの街をウォーターズさんが歩いていると、「ハーイ、ジョン！」なんて声をかけられたりしますか？／JW　どっちかというと、ニューヨークのほうが僕の名声は高いよ。ニューヨークの街を歩いていると、「あ、ジョン・ウォーターズだ」ってよく言われるから。もちろん、ボルチモアでもたまにあるんだけれど。ただ、ボルチモアの人たちは「ハーイ」と声をかけながらも、きっと頭の中では、「あいつ、まだ本当に有名になってないな。ボルチモアにまだいるんだから」と、思っているに違いない。だって、時々「あ、バリー・レヴィンソンだ！」（注：ウォーターズと同じくボルチモア出身／在住の映画監督。『レインマン』88、『我が心のボルチモア』90、『バグジー』91など清い作風で知られる）って間違えられるんだもん（笑）。

シンディ・シャーマン出演秘話

Q　（なわけないっつーの！　と心の中でツッコミつつ）ところで、シンディ・シャーマンが彼女自身の役で出ていますが、出演は快諾してくれたのでしょうか。／JW　二つ返事だったよ。シンディは、今回、"ペッカー"自体も非常に気に入ってくれて、うれしかったな。彼女自身がアート・ワールドにいながら、アート・ワールドに対してユーモアのセンスを持っているからね。自分としてはこの映画の中で現代アート界の実在の人、それも世界的に有名な人に出てもらえないかなと思って、ダメモトでお願いしたんだけど。出てくれただけじゃなく、自分のことを笑い者にできる寛大さも兼ね備えていたんです。だいたい脇役だから、ギャラも薄謝なわけ。それにも関わらず、１週間も撮影に付き合ってくれた。シンディには大変感謝

しています。　彼女が監督した『オフィスキラー』(98)はとても素晴らしい映画なのに、評論家の中には「何で芸術家があんな悪趣味な映画を作るんだ」って批判したやつらがいたんだ。何様だと思ってんだ、って感じだよ。この間、シンディの最新作をギャラリーへ観に行ったら、、これまたみんなをびっくりさせるような作品だったよ。僕の映画のファンならきっと喜ぶようなアートです。／Q　シンディは自分の映画にはちゃんと出てないのに、“ペッカー”には出ているのがおかしかったです。／JW　彼女の場合、これまでの作品の中でも自分自身ではなく、何かを演じていたわけだから、逆に自分自身として出るのにためらいがあったみたい。でも、「アート・ワールドのフェイム（虚栄）というものを出したいんだから、君自身として出てくれないと困る」ってくどいたの。本当は、現代アート界の中で彼女ほど才能があって、女性として美しい人っていないんだよね。スタイルも抜群で、ファッションも趣味がいいし。

コム・デ・ギャルソン好きの弁

Q　ウォーターズさんはいつもスーツとタイで決めてますね。足元はあえてスニーカーでドレスダウンしてる、と。／JW　そう。ふだんもこういう格好（笑）。でも、今日のスニーカーは、スーツと同じコム・デ・ギャルソンだよ。／Q　髪型を長髪からオールバックにしたのはナゼですか？／JW　そのときは伸ばせるだけの髪があったからさ（笑）。／Q　（笑）今のファッションは、スクエアな格好をして悪趣味な映画を作るのがクールというダンディズムからなんでしょうか。あと、映画のバジェットがだんだん大きくなって、偉い人と会う機会が多くなったせいもありますか？／JW　それは関係ないよ。だって“ペッカー”の予算は、『シリアル・ママ』のときの半分なんだもん。たぶん、人間40歳を過ぎると、どうでもよくなるんですよ。僕が今、川久保玲さんのコム・デ・ギャルソンが好きなのは、ユーモアのセンスをファッションにちゃんと入れてるからなんだ。たぶん彼女だけじゃないかな、ポリエステルをシルクよりも高く売る人というのは（笑)。

弁護士の道

Q　僕は弁護士になる人が多い大学に入ったんですけど、『ピンク・フラミンゴ』を観て、全部あなたのせいとは言いませんが（笑)、こういうヤクザな仕事をするようになりました。うちの親はずっと嘆いていたんですけど、僕が40を過ぎた辺りから諦めてくれました。ウォーターズさんのご両親は、カタギの方だと聞いていますが、どこらへんからご子息の人生を諦観（笑)、するようになったのでしょう？／JW　面白いことに、自分がもし映画作家の道を歩んでいなかったら、弁護士になってたはずなんだ。世界最悪の犯罪者たちを助ける弁護士にね。アメリカの法曹界はラッキーだったよね（笑)。僕の父は、心の中では嫌で嫌でしょうがなかったと思うんだけど、「お前が本当にやりたいことだったら」と、『ピンク・フラミンゴ』の製作資金を貸してくれたんだ。もちろん、後で僕は利子付きで返したけどね。だけど、いまだに父は『ピンク・フラミンゴ』を観ていないんだ（笑)。、今回、“ペッカー”のプレミア上映の後に自分の友だちに、「いいところもあったけど、何か納得できない悪いところもあった」と言ってたらしい。“ティーバッキン”とか、80代のおじいさんが理解不能でも当たり前だし。それから、「お前は年月と共に気が変になってるんじゃないか」とも言っていた（笑)。でも、さすがに子供も40代、50代になると、親との間に一つの条約を結ぶことができるわけで。「あなたはあなたの考え、僕は僕の考え、お互いの意見が違っても尊重しあいましょう」ってね。

笑いが国境を越える瞬間

Q　ウォーターズさんの作品というのは、趣味のいいバッド・テイストという柱が１本通っていながら、『ピンク・フラミンゴ』を撮ったら2度と『ピンク・フラミンゴ』みたいな映画を作らずに、たとえば、『シリアル・ママ』とか、今回の“ペッカー”とか、いい意味で観客の期待を裏切り続けている。そこが偉大だと思います。あなたのエッセイによれば、ウディ・アレンの『インテリア』とか芸術映画が好きだということですが、いつか完全にシリアスな映画を撮ってみんなを驚かそうとか、そういう野望はないんでしょうか？／JW　万が一自分がシリアスな作品を撮ったとしても、せいぜい20分までかな。やはり自分としては笑いが入る映画のほうが、作っていても楽しいし。僕が常に心がけてる挑戦というのは、万国共通、どこの国でも同じところでみんながドカーンと笑って欲しいってことなんだ。文化が違ってもセクシーとか恐怖というのは、比較的同じツボだと思うんだけど、笑いは難しい。映画を作ること自体は地獄の連続なんだけども、自分が仕掛けた笑いが国境を越えた瞬間を観たいがために、毎回、がんばっているんだ。

（1999年7月13日、銀座にて）





ペッカーの実在のモデル？　または、ペッカーになった男

～チャック・シャコシス　物語～

エドワード・ファーロング扮するペッカーが撮った写真を、実際に撮ったのがボルチモア・サービス・フォトの店員、チャック・シャコシス。メタルのメガネをかけ、霜降りのトレーナーを着た、地味な感じがする、でも、人の良さそうな青年。そんな彼もジョン・ウォーターズの映画に巻き込まれたことで、どうやら人生が変わったようだ。その辺をファイン・ライン・フィーチャーズ提供のプロダクション・ノート、『I love ペッカー』のアメリカのサイト、『ペッカー』のUSA盤DVDのチャック・インタヴューを基に探ってみた。

── なぜ、今回撮影することになったんですか？
CS　これにはちょっと面白い話があってね（笑）。ジョン・ウォーターズとは5、6年前から知り合いなんだ。そう、僕が働いているカメラ屋のお客さんだったんだよ。でも、ジョンは、今回の仕事をすることになるまで、僕が写真を撮るなんてことは全く知らなかったんだ。アート・スクールの学生だった頃に、ジョンの家へ、僕が作ったショート・フィルムを見せに行ったこともあったんだけどね（笑）。で、ジョンが『I love ペッカー』の製作に入ったとき、ニューヨークの写真家、マット・マフリンを呼ぼうとしていたんだよ。でも、マットはその頃とっても忙しくてスケジュールが合わず、「それなら、こいつがいいよ、ボルチモアに住んでるし」って、マットが僕を推薦してくれたんだ。そのとき初めてジョンは気づいたんだよ、「なんだ、あのカメラ屋の男じゃないか！」って（笑）。
── 撮影はどんな感じだったんですか？
CS　毎日毎日大変だったね。まず、エディ（ファーロング）が写真を撮るシーンを映画のクルーが撮影して、その後、エディが立っていた場所に僕が立ってカメラで撮影。で、自分の撮影が終わると急いで現像して、自宅の暗室へ駆け込んでベタを焼いて、プリントを焼く。翌日ジョンにセットでそれを見せてチェックしてもらう。全てのシーンでその繰り返し。おかげで睡眠不足になっちゃったよ（笑）。ジョンは、ダイアン・アーバスとか、ナン・ゴールディンみたいな写真をイメージしていたんだ。それで僕も、フォーカスを甘くしてみたり、露出を変えたり、フィルムにスクラッチを入れてみたり、普段ではやらないことをいろいろと試してみた。プリントも何パターンも焼いた。結果的に、アーバスとかロバート・フランクっぽい作風には仕上がったと思います。面白い経験をさせてもらいましたね。
── どのあたりで撮影したんですか？
CS　ボルチモアのハンプデンで全て撮影しました。面白いことにね、僕も高校生ぐらいの頃、この町に住んでいて。ペッカーと同じように、カメラでいろいろと撮影してまわっていたんだ。裏通りで撮影したり、知り合いの人を撮ったりとかね。
── ペッカーはどんなカメラで撮影していたんですか？
CS　ペッカーが持っているのは、程度のいい中古のキャノネット。60年代後半ぐらいのモデルじゃないかな。ショート・レンジ・ファインダーでとっても静か。シャッター押すたびにフィルムを巻き上げるやつ。ボルチモアのカメラ屋だったらどこでも手に入りますよ、30ドルぐらいで。僕自身が撮影に使ったのも中古で、ニコン2020をマニュアル・モードで。古ぼけた感じに写るように、レンズも中古のを使って撮影しました。
── スチール写真も撮ったんですか？
CS　いいえ。ミッシェル・ギンズバーグがスチール・フォトグラファーだったので、僕は全く撮っていません。だって、僕はペッカーだったのですから（笑）。撮影して面白かったのは、口が砂糖だらけの女の子（リトル・クリッシー）とか、ねずみの交尾とかですね。ねずみのセックスの写真は、ホントはちょっと失敗作だったんだけど（笑）、プリントしてみたら、とってもいい感じに上がったという。僕的には、ペッカーズ・プレイスのオープニング・パーティで飾ってある、ニューヨーカーたちの6枚の写真がどれも好きですね。
── カメラ屋の仕事が本業なんですか？
CS　ええ。まだ働いていますよ。「ボルチモア・サービス・フォト」という、プロ用のカメラ・ストアーで。フリーのカメラマンとしての仕事もちょくちょくやってますけれど。地元の出版社で。『ボルチモア・サン』とか『シティ・ペイパー』とか『ワシントン・ポスト・マガジン』だとか。
── 自分の写真を映画で観るのはどんな感じでしたか？
CS　何だか不思議な気持ちですね。
── あなたもペッカーになったのかな？
CS　おかげさまで（笑）。こんな大きなプロジェクトに関わらせてもらったおかげで、ニューヨークの業界が興味をもってくれて。いろんな雑誌社から撮影の依頼が来るようになった。ペッカーの身に起こったことが、僕にも起こったんですよ（笑）。








Baltimore
PECKER, HAMPDEN'S NEW STAR

イノセントな写真家

文・高橋周平（写真評論家）
text by Syuhei TAKAHASHI

生き方はドアノー風、作風はアヴェドン調。

この映画の主人公ペッカーのように、たった一枚の写真が誰かの目に留まり、いきなり有名写真家になってしまうという話は事実本当にある。というよりも、写真やアートの世界では頻繁に起こっているし、そういう錬金術的マジックがあるからこそ、夢を見る若者は後を絶たない。たとえば、80年代を代表する肖像写真家ハーブ・リッツは、学生時代に友人だった無名のリチャード・ギアを撮って、それをニューヨークの雑誌に軽い気持ちで送ったところ、ふたりとも同時に注目されるようになった。この映画に本人自身として登場しているシンディ・シャーマンも、学生時代に病みつきだった「変身ごっこ」を何気なく写真にしたことがきっかけで、セルフポートレイトのアーティストになった。パリの安アパートを根城に、時たま「ヴォーグ」に作品を持ち込んでいる写真家志望の若者は、こんなことを言っていた。「とにかく一枚『ヴォーグ』に載っかればいいんだよ。そうすれば翌月には世界中が僕のことを知るようになるし、チャンスはぐんと増える」。

たしかにその通りだし、特にファッション写真の世界では、このマジックを経験した者だけが写真家になれる。

ところがこのペッカーの場合は、そんなふうな計算や名誉欲はまったくない。町の人々にカメラを向けるのを、毎日うきうきと、子どものちょっとしたいたずらのように楽しんでいるだけだ。彼はまるでシャッターハイな状態で毎日を過ごす。モデルにさせられる彼の周りの住人たちは、彼のいたずらに付き合ってやっている。彼のようなイノセントな写真家はいただろうか？　映画の中では、「第二のダイアン・アーバス」とまで言われているけど、本当のところは、自分の町を愛し続けたパリの写真家ロベル・ドアノーに近い。地元の人気者ドアノーが写真を撮りはじめると、通りの人が次々に声をかけたという。

ペッカーは、地元住人たちのスナップが評価され、ニューヨークで個展を行う。その時の写真には人々の感情や暮らしぶりが生き生きとユーモラスに描かれ、本当にドアノーのスナップを見ているようだ。そして今度は、いろいろあった揚げ句に、地元バルチモアで二度目の個展をすることになるのだが、今度は一転して、先にニューヨークで撮った「業界の人々」のスナップが中心になっている。その写真はまったくドアノー的ではない。もっとスリリングなムードの写真、アメリカでもっとも成功したファッション写真家リチャード・アヴェドンの作風に近似している。被写体のプライドが高く、それが滑稽に見えてくるところなど、まさにそっくりだ。

写真が主人公の映画

この映画を楽しむツボは、「写真」を主人公として楽しむことにある。監督のジョン・ウォーターズは「ディレクターズ・カット」という豪華な「写真集」を出版したこともある（ただしペッカーの写真とは似ても似つかない。もっと観念的)。アメリカ人が大好きなホイットニー美術館を実名で登場させて描かれる、アート業界のややもすれば滑稽なありさまは、彼がアーティストとして実際に体験したことでもある。

実際にこの巧みな撮り分けをした写真家は、チャック・シャコシス。今はまだ無名だが、相当うまい。彼にとっては、この映画の主人公である「写真」を撮ったということで、写真界・アート界でいきなりブレークする可能性だってあるんじゃないだろうか？

ややマニアックな楽しみ方かもしれないが、先のシンディ・シャーマンやハリウッドご用達の肖像写真家グレッグ・ゴーマンも登場したことにも、現代美術や写真のファンは驚いたに違いない。ふたりとも日本で個展を経験済みの超有名写真家だ。シリアスな彼らがけっこう間抜けな役を引き受けて楽しませてくれる。

ところで、僕らもペッカーになれるだろうか。毎日カメラを持って気持ち良くまわりと付き合っていればきっとなれる、と、この映画は背中を押してくれているような気がする。

ファー・アウトなノベルティ・ソングス

文・小柳帝（モンド・ミュージック愛好家）
text by Mikado KOYANAGI

ユーモアに溢れた選曲

ジョン・ウォーターズの新作『I love ペッカー』の音楽を担当したのは、表面上はポリスのドラマーとして活躍したスチュワート・コープランド（いや、もちろん彼が作ったジャズっぽい曲も悪くないのだが、いかんせんそれほど目立たない）だが、実際はジョン・ウォーターズ自身が選曲した50年代から70年代にかけてのヒット曲が、この映画のカラーを決定している。そういう意味では、ジョン・ウォーターズは、この映画のサウンドトラックを決定する上で、クエンティン・タランティーノやヴィンセント・ギャロのような役割を果たしたことになる。特に、ビリー・ウィリアムズの57年のヒット曲（ビルボード最高位3位）「アイム・ゴナ・シット・ライト・ダウン・アンド・ライト・マイセルフ・ア・レター」は、ずっと自分の映画に使いたかった曲だと述懐している。

50年代末から60年代初頭といえば、誰しもロックンロールを思い出す時代。ジョン・ウォーターズ自身、『クライ・ベイビー』（90）で、『ウェスト・サイド物語』（61）や『アメリカン・グラフィティ』（73）のパロディをおこなった。いわゆるツイスト、リーゼント、チキンレースといった、この時代の典型的なアイコンを取り上げ、皮肉っぽくミュージカル仕立てで描いて見せたが、そこでは絵にかいたようなロックンロールやロカバラードを、あえてオリジナル曲で再現した。ステレオタイプ化されたフィフティーズに対する強烈な風刺。そのアンチ・テーゼともいえるのが、前述したビリー・ウィリアムズのような曲である。冒頭や間奏部分の奇妙なトランペットのフレーズ、色っぽい女性コーラスとの掛け合い、途中でラテン風のリズムに切り変わるアレンジ、一筋縄ではいかないユーモアに溢れたナンバーだ。こうした、アメリカ人のいうところの<ファー・アウト>なノベルティ・ソングが、この映画では要所要所で使われている。

モンドな逸品多し。

映画の冒頭とエンディングに、まるでこの映画の主題歌のように使われたポール・エヴァンスの60年のスマッシュ・ヒット（最高位17位）「ハッピー・ゴー・ラッキー・ミー」は、ジョン・ウォーターズもいうように、本当に誰もをハッピーにさせてくれる曲だけど、カントリーの要素が田舎町ボルチモアを表現し、間奏部分とラストのエコーのかかった哄笑がこの町の住人のちょっと<ファー・アウト>な生き様を象徴している。そして、リロイ・プリンズの66年の小ヒット（最高位57位）「アイム・ナッツ」は、まさにペッカーそのもの。ジェリー・ルイスのような脱臼的歌唱法が最高だ。ただただクレイジー。ロッカティーンズの59年のヒット曲（最高位16位）「ウー・フー」は、この映画で唯一のロカビリーながら、やっぱりどこかヘンなカンジは十分に伝わるハズ。そして極め付けが、ナッティ・スクウォーレルズの「アウ！オウ！(パート1)」とヘンハウス・ファイヴ・プラス・トゥーの「イン・ザ・ムード」。片や、ナッティは、サッシャ・バーランドとドン・エリオットによる、チップマンクス・スタイルのいわゆる<ムシ声>、つまりテープを早回しした、あの「オラは死んじまっただ」ボイス、片や、ヘンハウス（この名前自体が、ファイアーハウス・プラス・ファイブのパロディ）は、レイ・スティーブンスによるベニー・グッドマンで有名なスタンダード曲「イン・ザ・ムード」の、それもなんとチキン・ボイスによるカバーなのだ。どちらもナンセンスの極みを行く、これぞモンドな逸品。

オフ・ビート感を強調するウォーターズの確信犯ぶり

この映画のオフ・ビート感を、こうしたノベルティ的な楽曲をフィーチャーすることで強調したジョン・ウォーターズの確信犯ぶりはこの点にとどまらない。というのは、タランティーノなどと同様に、こうした選曲のセンスが１本の映画という問題を越えて、現在進行形の音楽シーンとも強い親和力を示しているからだ。こうした50年代から60年代の埋もれた<ファー・アウト>なポップス、特にカントリー畑のそれに対する注目が音楽ファンの間で非常に高まってきていることと微妙にシンクロしている点が実に興味深い。それはさておき、劇中、ニューヨークからボルチモアへとペッカーとその仲間たちがグレイ・ハウンドで戻ってきたときに、象徴的に流れるデイヴ・ハーディンの「ボルティモア、ユー・アー・ホーム・トゥ・ミー」は、この映画にあっては異色とも思えるほどありきたりなカントリーなのは、いったいなぜなのだろうか。








A PEEK AT PECKER
WHITNEY MUSEUM OF AMERICAN ART

エドワード・ファーロング（ペッカー役）
EDWARD FURLONG : Pecker

「この映画では楽しんでやろうと思った。ジョン・ウォーターズの思考方法に入り込んでね。ペッカーは本当にハッピーな人間だと思う。彼の目を通すと、平凡でノーマルなものが滑稽なものになる。ジョンは、僕の周りで起きていることとペッカーの内部で起きていることのバランスを上手に保つように仕向けてくれましたね」とは、90年代を代表する若手スターのひとり、ファーロングの弁。これまでドラマチックな作品が多かった彼にとって、『I love ペッカー』はリラックスして演技できる作品になったようだ。

ファーロングがブレイクしたのは、ここ10年間のビッグ・ヒット作のひとつ、ジェイムズ・キャメロン監督の『ターミネーター 2』(91)。アーノルド・シュワルツェネッガーと共演したSFアクション映画で、ファーロングは"ジョン・コナー"を好演。結果、MTVアワードのブレークスルー賞を受賞した。

名うての演技派と共演することも多く、その手の主な出演作には、リーアム・ニーソン、メリル・ストリープとの『判決前夜　ビフォア・アンド・アフター』(95)、ヴァネッサ・レッドグレープ、ティム・ロスとの『リトル・オデッサ』(94)、ウォルター・マッソー、ジャック・レモンとの『グラスハープ』(95)がある。また、『アメリカン・ハート』(92)では、IFPスピリット・アウォードの助演男優賞を受賞した。

次回作は、エドワード・ノートン、フェイルーザ・バーク、ビヴァリー・ダンジェロと共演する『アメリカン・ヒストリー X』。スティーブ・ブシェミ監督の"THE ANIMAL HOUSE"や"DETROIT ROCK CITY"といった作品も控えている。

クリスティーナ・リッチ（シェリー役）
CHRISTINA RICCI : Shelley

「ペッカーが成功したせいで、彼女は仕事から離れて彼と一緒にニューヨークに行かなくてはならなくなる。彼女とペッカーの心は離れてしまい、映画の中のシェリーはほとんど終始、心配顔で過ごす。ペッカーに起きていることと、それが彼女にどう影響するかを考えてね」とは、今やエキセントリックな役をやらせたら世界一のリッチによる心優しきコメント。とはいえ、その毒舌ぶりは"リッチ・ビッチ"と異名を取るほど有名。『プレミア日本版』1999年11月号によれば、数週間にわたるボルチモア・ロケ後、「ボルチモアなんて大嫌い！」と記者に言ってのけたとか。彼女のコメントを耳に挟んだ、"ミスターI love ボルチモア"ことジョン・ウォーターズ監督は、笑って許したそうだけれど、さて、腹の中は……。

ご存じのとおり、リッチは子役上がり。『恋する人魚たち』(90)で映画デビュー。シェールの末娘で、ウィノナ・ライダーの妹という美味しい役を演じた。その後、『アダムス・ファミリー』(91)とその続編『アダムス・ファミリー2』(93)の"ウェンズデイ・アダムス"役で観客と批評家をトリコに。続いて、『キャスパー』(95)、『ゴールド・ディガーズ　伝説の秘宝を追え！』(95)、『Dearフレンズ』(95)に出演。N.A.T.O.ショウイースト・スター・オブ・ジ・イヤー賞（95）とスター・オブ・トゥモロー賞（95）を受賞する。

アン・リー監督のアメリカ版山田太一ドラマ？『アイス・ストーム』(97)の不機嫌な妹役で演技派として注目を集め、『熟れた果実』(98)の小悪魔役でマニアを唸らせ、ヴィンセント・ギャロ監督の『バッファロー'66 』(98）のレイラ役でブレイクする。今もっともホットな若手女優として一癖ある監督にモテモテである。

最近作はテリー・ギリアム監督の『ラスベガスをやっつけろ』(98)、『200本のたばこ』(98)、"DESERT BLUE"(98)。そして、"ラスベガス"に続き、ジョニー・デップと共演となるティム・バートン監督の『スリーピー・ホロウ』の公開も待たれている。


KOVELS



リリ・テイラー（ローレイ・ウィーラー役）
LILI TAYLOR : Rorey Wheeler

1995年、『I SHOT ANDY WARHOL』（メアリー・ハロン監督）のウォーホルを狙撃するフェミニスト役、共同脚本も担当した"GIRLS TOWN"、『コールド・フィーバー』が同時にサンダンス映画祭に出品され、それぞれの演技が批評家から絶賛される。また、この3作によってテイラーは初のサンダンス特別審査 員賞演技賞を受賞。以後、多様な役の選び方と幅広い芸風の女優として知られることになる。

彼女の映画デビューは、ジュリア・ロバーツとの共演作『ミスティック・ピザ』(88)。その後、『セイ・エニシング』(89)、『7月4日に生まれて』(89)、『ショート・カッツ』(93)、『ミセス・パーカー ジャズエイジの華』(94)、『プレタポルテ』(94)、『フォー・ルームス』(95)、『身代金』(96)、ヤン・デ・ボン監督の『ホーンティング』(99)……と濃い作品に出演する。また、"HOUSEHOLD SAINTS"(93)では、インディペ ンデント・スピリット賞の助演女優賞を受賞した。

最新作には "JANIS"（テイラーがジャニス・ジョップリンを演じる)、ジョン・キューザック監督 "HIGH FIDELITY" などがある。

マーサ・プリンプトン（ティナ役）
MARTHA PLIMPTON : Tina

12歳のときに初めて『ピンク・フラミンゴ』を見たせいで悪夢に悩まされたというプリンプトン曰く、「ジョン・ウォーターズ監督の映画はどれも、彼のホームタウンの愛すべきポートレイトなの。ウォーターズはボルチモアに対して全肯定と愛情をもってオマージュを捧げ続けているんだわ。実は私のママはちょっと変わっていて、なんと『ピンク・フラミンゴ』ファンなの。私がこの映画に出ると知ったら興奮しちゃって、何度もセット遊びに来てしまったわ（笑)」。

彼女は26歳にして、すでにベテラン映画女優の風格を持つ。30作品以上の映画に出演していて、主な作品にはリヴァー・フェニックスと共演した『旅立ちの時』(88)、『I SHOT ANDY WARHOL』(95)、『ビューティフル・ガールズ』(96)などがある。『グーニーズ』(85)、『モスキート・コースト』(86)、『バックマン家の人々』(89)といった娯楽作品から、ウディ・アレン監督の『私の中のもうひとりの私』(89)やアラン・ルドルフ監督の『ミセス・パーカー ジャズエイジの華』(94)まで、と出演作の幅は広い。

新作はベンとケイシーのアフレック兄弟、クリスティーナ・リッチらも出演している『200本のたばこ』。そして、ブレンダ・ブレッシン、ジュード・ロウと共演した"MUSIC FROM ANOTHER ROOM"。また、今年はシカゴの名門、ステッペンウルフ劇場で"PLAYBOY OF THE WESTERN WORLD"に出演した。

メアリー・ケイ・プレイス（ジョイス役）
MARY KAY PLACE : Joyce

ここ20年の間で、かなり評価の高い性格俳優のひとり。

主な出演作には、マーティン・スコセッシ監督の『ニューヨーク・ニューヨーク』(77)、『結婚ゲーム』(79)、ゴールディ・ホーン主演の『プライベート・ベンジャミン』(80)、ローレンス・カスダン監督の『再会の時』(83)、『のら猫の日記』(96)、ローラ・ダーンと共演した『スムース・トーク』(85)などがある。最近ではフランシス・フォード・コッポラ監督の『レインメイカー』(97）の演技が絶賛された。

彼女はテレビ作品にもけっこう出演。人気TV番組"MARY HARTMAN, MARY HARTMAN"のおかげで、多くの視聴者に愛されている。また、TV番組『フレンズ』、"DREAM ON"では、いくつかのエピソードを監督した。

ローレン・ハルシー (リトル・クリッシー役)
LAUREN HULSEY : Little Chrissy

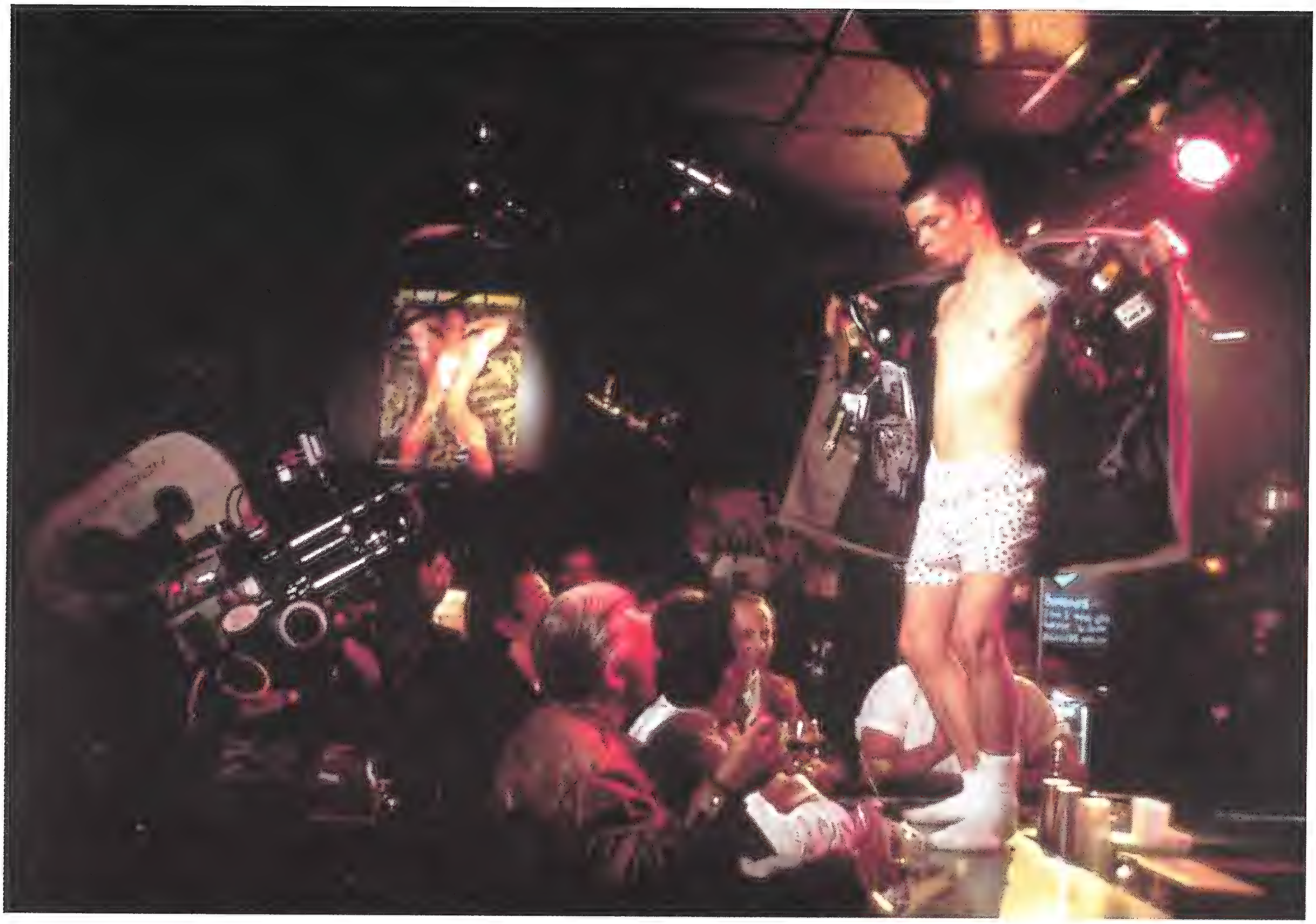
果たして第2のリッチになるのか、ドリュー・バルモアになるのか、それとも……。ローレンはわずか9歳ながらも、すでに多くの経験を積んできているりっぱな女優である。
最初にスクリーンに登場したのは "WASHINGTON SQUARE" (97/未公開)の"エディス"役。続いて、ブルース・ウィリス主演のアクション映画『ジャッカル』(97)では、小さな役にも関わらず強い印象を残した。 TV番組『ホモサイド殺人捜査課』やコマーシャルにも出演。地元のコミュニティ劇団にも参加している。
『I love ペッカー』は、ローレンにとって今までで一番大きい役。来日したジョン・ウォーターズ監督は記者会見で「この映画で僕が一番感情移入してるのは、ペッカーじゃなくて、リトル・クリッシーなんだ (笑)」とうそぶいていた。

ブレンダン・セクストンIII (マット役)
BRENDAN SEXTON III : Matt

サンダンス系若手男優か？　ブレンダンが最初に映画界で注目を集めたのは、トッド・ソロンツ監督の『ウェルカム・ドールハウス』(95)。この作品は1996年サンダンス映画祭の審査員賞を受賞し、結果、ブレンダン自身もインディペンデント・スピリット賞のベスト・デビュー・パフォーマンスにノミネートされた。1997年サンダンス映画祭で観客賞、撮影賞、監督賞を受賞した『ハリケーン・クラブ』(97)にも主演している。
その他の主な作品には、、アラン・モイル監督の『エンパイア・レコード』(95) がある。最新作は、リッチも出演している、モーガン・J・フリーマン監督の"DESERT　BLUE"。

シンディ・シャーマン (彼女自身)
CINDY SHERMAN : Herself

初監督作品『オフィス・キラー』(98) でアート・ファンだけでなく、ホラー・ファンもビビらせたニューヨーク現代アート界のスター、シンディ・シャーマン。自分の映画にはハッキリと分かる形で出演しなかったにも関わらず、『I love ペッカー』では、アート・フリークであるジョン・ウォーターズのたっての願いで自分自身の役で登場。ニューヨーク現代アート界のリアリティを醸し出している。
少女の頃から変装が好きだったシンディは、ニューヨーク州立大学在学中、1975年辺りから、B級映画の様々なヒロインに扮したセルフ・ポートレート作品"UNTITLED FILM STILLS"を発表。いきなり人気者となる。その後、作風はどんどんディープな方向へ向かい、ここ数年の作品ではホラー映画のスチールの如く、バッド・テイストあふれるものと化している。ボルチモアでバッド・テイストを追求しながらニューヨークでアート的な評価を受けたウォーターズと、ニューヨークでアートを追求しながらバッド・テイストに堕ちていったシャーマンが、"ペッカー"で幸福な出会いをしたということだろうか。





ジョン・フィードラー＋マーク・ターロフ（プロデューサー）
JOHN FIEDLER + MARK TARLOV : Producers

ここ数年、彼らは共同でプロデュース。デミ・ムーア、ブルース・ウィリス、ハーヴェイ・カイテル主演のアラン・ルドルフ作品『愛を殺さないで』(91)、コリン・フリールズ、ショーン・コネリー主演のブルース・ベレスフォード作品『グッドマン・イン・アフリカ』(94)、シガニー・ウィーバー、ホリー・ハンター主演の『コピーキャット』(95)などを手がけた。2人がウォーターズと最初に組んだのは94年公開の『シリアル・ママ』。現在はターロフの監督デビュー作"VANILLA FOG"を製作中である。

ロバート・スティーブンス（撮影監督）
ROBERT STEVENS : Director of Photography

『シリアル・ママ』(94)に続き、ウォーターズ作品は今回で2作目。レスリー・ニールセンの人気シリーズ『裸の銃〈ガン〉を持つ男』(88)、『裸の銃〈ガン〉を持つ男PART2 1/2』(91)、『裸の銃〈ガン〉を持つ男PART3 1/3 最後の侮辱』(94)でいい仕事もしている。その他の主な作品には、ジョー・ダンテ監督の"THE BURBS"(89)、ジョン・アミエル監督の"TUNEIN TOMORROW"(90)、『ジョン・キャンディの夢におまかせ』(91)、"BEYOND THE LAW"(92) 『知らなすぎた男』(98)、現在製作中の"VANILLA FOG" がある。

ヴァン・スミス（衣装）
VAN SMITH : Costume Designer

『ピンク・フラミンゴ』(72) 以来、『フィメール・トラブル』(73)、"DESPERATE LIVING"『ポリエステル』(81)、『ヘアスプレー』(87)、『シリアル・ママ』(94)と、ウォーターズ作品の衣装を総て担当。"醜悪のエキスパート"という異名を持つ。とはいえ、TV番組『ホモサイド殺人捜査課』やPBSのコスチューム・ドラマの仕事やオフ・ブロードウェイのショウやカフォルニアのインディペンデント演劇作品も手掛ける一面も。著書に "DIVINE PAPER DOLL CUT OUT BOOK" がある。副業（本業!?）として、ボルチモアにて"20世紀"の商品を扱うアンティーク・ショップ<NIGEL SMITH>を経営している。

パット・モーラン、C.S.A.（キャスティング・ディレクター／アソシエイト・プロデューサー）
PAT MORAN, C.S.A. : Casting Director, Associated Producer

ウォーターズのマブダチ。1964年以来、ウォーターズ組の共同製作者兼名キャスティング・ディレクターとして働く。ボルチモアでキャスティング・エージェンシーを立ち上げて大成功している人でもある。バリー・レヴィンソン、ピーター・メダック、ジョン・マクノートン、ジョディ・フォスター、クリント・イーストウッド、リドリー・スコット、トニー・スコットといった普通の監督との仕事も多い。主な作品には『わが心のボルチモア』(90)、『ホーム・フォー・ザ・ホリデイ』(95)、『G.I.ジェーン』(97)、『エネミー・オブ・アメリカ』(98)がある。ディズニー、フォックス・テレビジョン、HBOのプロジェクトを含むTV番組でも成功している。TV番組『ホモサイド殺人捜査課』ではエミー賞に3回ノミネートされた。

スチュワート・コープランド（音楽）
STEWART COPELAND : Music

ご存じ、元ポリスのドラマー。『I love ペッカー』ではジャズやブルースをルーツにしたインストゥルメンタル作曲・演奏をしている。映画音楽に進出したのは早く、フランシス・フォード・コッポラ監督の『ランブル・フィッシュ』(83)が最初。実験性に富みながらもリリカルなサウンドトラックが好評で、以後、映画の仕事をけっこう手がける。オリバー・ストーンやジョン・ヒューズとも仕事をしている。主な作品には、『ウォール街』(87)、『トーク・レディオ』(88)、『結婚の条件』(88)、『ハイランダー2』(91)、『フレッシュ』(94)、"Airbone"(93)、『ハッピィブルー』(96)、『グリッドロック』(97)がある。






Pecker



完璧な衣装とセット

　ニューヨークのシーンは、衣装のヴァン・スミスにとって、ボルチモアとの文化的対比をいかに表現するかという腕の見せどころだった。ボルチモア・ピープルの服装は、ペッカーの母親が経営するジモティ向けショップ「バーゲン・ハット」風になるよう絶妙にコーディネイトされた。ニューヨーカーのファッションについては、コム・デ・ギャルソンやトッド・オールドマンといったウォーターズお気に入りのデザイナーの協力を得た。
　同様に、美術のヴィンセント・ペラニオは、ベタなマンハッタン的空間をボルチモアに作り出すように工夫をこらした。ローレイのギャラリーは汚れひとつない白壁と間接照明と滑らかなコンクリートの床を備えた空間だが、これはなんとボルチモアのダウンタウン、ウォーターフロント近くのオフィス・ビル１階にある、内装の施されていない空き部屋に作られた。一番難易度の高いセットは、ニューヨークの有名なレストラン「バワリー・バー」を正確に再現することだったという。
「長椅子に使っているガラスやテーブルクロスに至るまでのディテールがパーフェクトでなければならなかった。ニューヨークの美術界の集まりに何度も行ったことがあるが、ボルチモアでニューヨークを撮るなら継ぎ目ひとつあってはならないからね」（ジョン・ウォーターズ）

自宅でリハーサル

　ウォーターズは撮影が始まる１週間前に、俳優たちをリハーサルのためボルチモアに集めた。リハーサルは形式ばらず、監督の自宅で行われた。
「コメディではリハーサルをやりすぎないほうがいい。たいていは最初のテイクが1番いいんだ。そうでなければ最後のテイクが。自然発生的に起きる何かがコメディではとても大切だ。テイクのあとでスタッフやキャストが笑うかどうか、僕は耳を澄ます。どのテイクも短いテスト試写みたいなものなんだから。僕が作りだした登場人物を役者が動かしてくれると信頼していた。みんないい仕事をしてくれたよ」（ジョン・ウォーターズ）

ゲイの天国

　ボルチモアの派手なナイトスポットのひとつ「アトランティス」は、ペッカーの姉でゲイが大好きなティナが働く「ファッジ・パラス」という名の男性専門のゴー・ゴー・クラブとして撮影に使用された。美術のヴィンセント・ペラニオは「ファッジ・パラス」を作るために「アトランティス」（たまたまボルチモアの刑務所の隣に位置していた）の外観をそっくり変えてしまった。
「ここはものすごくハッピーな場所にしたかったんだ。"みんなここが好き。このバーに入り浸るしかない"っていうようなね。ただしウォーターズ流の場所だからさ。本物よりもぶっ飛んでる。だからみんな、ここが今まで経験した中で一番ハッピーでクレイジーなゲイ・バーなんだって気持ちになってくれ！　ここにはトラウマも、性悪のボーイフレンドもいない。アル中もドラッグ中毒もここにはいない。ここにいる男たちはみんな君のものになるし、彼らも君を欲しがってるんだ！ OK! ダンサーたち！　露出狂になってくれ！　これはジョン・ウォーターズ作品でR指定なんだから！」（ジョン・ウォーターズ）

【キャスト】

ペッカー：エドワード・ファーロング
シェリー：クリスティーナ・リッチ
ドクター・クロンプ：ベス・アームストロング
ジミー：マーク・ジョイ
ジョイス：メアリー・ケイ・プレイス
ティナ：マーサ・プリンプトン
マット：ブレンダン・セクストン III
選挙投票場主任：ミンク・ストール
ローリー：リリ・テイラー
リン・ウェントワース：パトリシア・ハースト
ミーママ：ジーン・シェートラー
リトル・クリッシー：ローレン・ハルシー

【スタッフ】

脚本・監督：ジョン・ウォーターズ
製作：ジョン・フィドラー、マーク・ターロフ
製作総指揮：マーク・オーデスキー、ジョナサン・ウェイスガル、
ジョー・レヴィット、ジョー・カラッチョーロ Jr.
撮影監督：ロバート・スティーブンス
編集：ジャニス・ハンプトン
美術：ヴィンセント・ペラニオ
衣装：ヴァン・スミス
キャスティング：パット・モーラン、ホプキンス・スミス・バーデン
音楽：ステュワート・コープランド

CAST

Pecker : Edward Furlong
Shelley : Christina Ricci
Dr.Klompus : Bess Armstrong
Jimmy : Mark Joy
Joyce : Mary Kay Place
Tina : Martha Plimpton
Matt : Brendan Sexton III
Precinct Captain : Mink Stole
Rorey : Lili Taylor
Lynn Wentworth : Patricia Hearst
Memama : Jean Schertler
Little Chrissy : Lauren Hulsey

STAFF

Writer/Director : John Waters
Producers : John Fiedler, Mark Tarlov
Executive Producers : Mark Ordesky, Jonathan Weisgal,
Joe Revitte and Joe Caracciolo,Jr.
Director of Photography : Robert Stevens
Editor : Janice Hampton
Production Designer : Vincent Peranio
Costume Designer : Van Smith
Casting Directors : Pat Moran, Hopkins-Smith-Barden
Music : Stewart Copeland


NATTY Boh
CRABS
NO PERSONAL
CHECKS



リレー・エッセイ

宣伝マンが語る、恵比寿ガーデンシネマNEXT COMING

200 CIGARETTES

200本のたばこ

リサ・ブラモン・ガルシア第一回監督作品

キャスト：ベン・アフレック、ケイシー・アフレック、デイヴ・チャペル、ジャニーン・ガラファロ
ギャビー・ホフマン、コートニー・ラヴ、ジェイ・モア、マーサ・プリンプトン
クリスティーナ・リッチ、ポール・ラッド、エルヴィス・コステロ

1998年アメリカ／パラマウント・ピクチャーズ＝レイクショア・エンタテインメント提供／MTVフィルムズ＝ドッグスター・フィルムズ共同提供／カラー ／ヴィスタサイズ／1時間42分／ドルビーSRD
提供：アスミック・エース エンタテインメント／ノベライズ：角川書店／配給：アスミック





(1)

キュートなラヴ・ストーリーズは出演者も最高にキュート！

~ケイシー・アフレック来日記~

文：アスミック・エース エンタテインメント 宣伝プロデューサー 林田 真由

『200本のたばこ』には、『I love ペッカー』でもかわいい魅力を見せているクリスティーナ・リッチや、マーサ・プリンプトン、『アルマゲドン』のベン・アフレック、『ラリー・フリント』のコートニー・ラヴ、『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』のケイシー・アフレック、『ロミオ＋ジュリエット』のポール・ラッド、『ザ・エージェント』のジェイ・モアなどなど、とにかく豪華な若手スターたちが総出演。これだけのキャストを一同に集めることができたのは、リサ・ブラモン・ガルシア監督が『スピード』や『JFK』など数々の大作でキャスティング・ディレクターを務めてきた経歴のなせる業なのでしょう。

来日キャンペーンをするにあたって宣伝チームで話し合ったのは、『誰を呼ぶ？』という贅沢な問題だった。通常来日させるのは監督や主演俳優。でもこの映画はいろんなエピソードがちらばっているアンサンブル・ムービー。誰もが主役。予算が許すなら全員に来て欲しい。話し合いを積み重ねて、結局来日してもらったのは"ポスト・ディカプリオのヤングスター"勢の中でも要チェック！のケイシー・アフレックだった。

青田買いの得意な女性ライターの間では、兄ベン・アフレックよりもずっといいと注目を集めている彼。ホテルで出迎えた時は、長旅の疲れは見えるものの予想に違わぬカワイさに、思わず女性宣伝マンの頬が緩む。一日だけのオフを挟んで始まったインタヴューでは、「兄のベンは17歳までゲイだった」「ベンとマット・デイモンはデキている」「クリスティーナ・リッチはジャンキーでね」など、随分過激な冗談を真顔で平然と言ってのける。最初は驚きながら真面目に訳していた通訳さんも、『ここからは冗談です、たぶん』と一言いってから訳すようになってしまった。一方で、ベン・アフレック&マット・デイモンが一夜にしてスターダムに上ったことによる良い部分や悪い部分両方を間近で見ているだけに、仕事やマスコミに対するしっかりとした考えも持っている。

でも最大の魅力は、キュートな笑顔と優しい仕種。朝から晩までぎっしりと詰まったスケジュールにも嫌な顔ひとつせず、逆に私たちに「疲れているんじゃないの」と気を遣ってくれる。インタヴュアーや編集者は女性がほとんど。プレゼントを持ってきてくださる方も多く、そんな時は最高の笑顔でハグしながら「ありがとう！」。女性陣は完全に舞い上がってしまう。一週間にも満たない短い間だったけれど、彼は確実にみんなのハート(特に女性陣の！)を鷲づかみにして帰った。次に来日するときにはもっともっと大スターになっていることでしょうが、私たちのことも忘れないでね！



(2)



(3)



(4)

(1) 現在大ブレイク中のクリスティーナ・リッチ

(2)『I love ペッカー』ではペッカーの姉役のマーサ・プリンプトン。『200本のたばこ』では重要な役をかわいく演じています。

(3) 右端が今回来日を果たしたケイシー・アフレック

(4) 歓迎パーティーにてのポラロイド。ゲストそっちのけで酔っ払ってしまった人、多数。すみません……。



Welcome to Pecker's Place



Pecker's photos, Tina's gayfriends' dance, Joyce's selection of cheep chic dresses, sea foods&drinks, and the statue of real talking Mary......... PECKER'S PLACE have every things that we need to live. So, when you come to Boltimore, please come and join our PECKER'S PLACE. We always wellcome your coming.

We Serve All It!

Pecker's Place
Baltimore,Maryland,USA



a Peek at Pecker

Whitney Museum of American Art

December 4th. 1998 - January 25th. 1999

Editor:Rorey Wheeler

Published by Whitney Museum of American Art
Photographs by Pecker

First edition

Printed by Dreamlanders Printing,Baltimore,Maryland,USA

Cover:Shelley at Laundromat #1, Baltimore,1998

a Peek at Pecker

Whitney Museum of American Art

December 4th. 1998 - January 25th. 1999

T-Bone at Pelt Room, Baltimore,1998




VENDED CARTONS 1 00 37000
01101 6
ULTRA2
Tide
1 LOAD
NO
OSPHATE
DO NOT STACK
OVER 12 HIGH
22354
Tide


Tide
Wisk

preceding pages: Shelley at Laundromat #2, Baltimore,1998

left:Man at Laundromat, Baltimore,1998


COLD
SODAS

Memama with Maria, Baltimore,1998



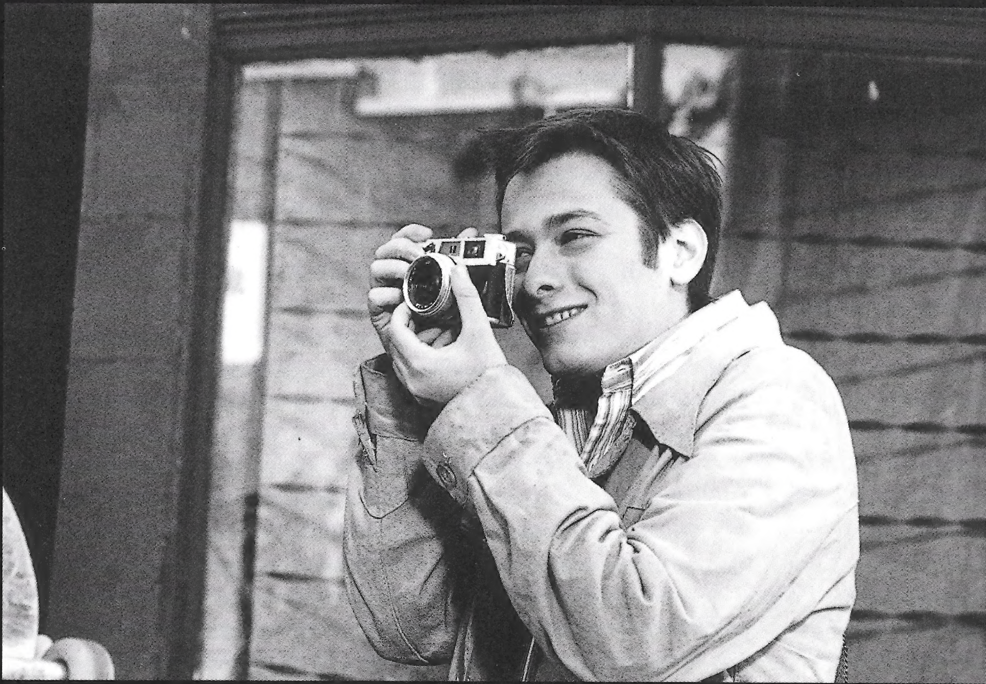
left:Tina at Hudge Place, Baltimore,1998

following pages:Little Chrissy at Kitchen









Pecker,photographed by Shelley , Baltimore,1998

This photo-exhibition is the very first time of Pecker, an America's most unlikely photographer who suddenly appears and create a sensation in New York art world. Pecker is 18-year-old boy who comes from Baltimore, so called the place of culturally challenged. He works in a Baltimore sandwich shop and takes photos with second-hand camera of his loving but peculiar family and friends on the side.
Pecker's pictures - sometimes grainy, sometimes out of focus and often over-exposed - are far from professional, but you can feel something hot and feel the soul of blue-collar passion of Baltimore. He always focuses on - gloomy of a young lady who runs a laundromat, a lesbian strip dancer, a man masturbating with a washing machine, a gayfriendly lady in a gaybar, a poor old woman who talking with statue of Mary, a sugar-aholic little girl, and so on. He straightly focuses on the darkside of the human beings but his eyes are always gentle, grace, and warm.
That's why he's called "the humane Dian Arbus of 90's". Pecker, by the way, so named for his childhood habit of "pecking" at his food.

Rorey Wheeler

"Pecker causes tizzy in art world"

New York Observer

**"Pecker takes Manhattan!
Appearance of a genius photographer!"**

Art News

"New York art world mad at Pecker!"

Village Voice

"Highly succeeded on taking new photographs with Mom's second-hand old camera. Pecker's delicious photographs of his culturally challenged family are fabulous! Pecker is the 90's Dian Arbus."

New York Times